2023年度

ＳＢ　小　論　文

3月12日（日）　人文社会科学部　（言語文化学科）　10：00～11：30
【後 期 日 程】

注　意　事　項

試験開始前

1　監督者の指示があるまで，問題冊子，解答用紙，下書き用紙に手を触れてはいけません。

2　監督者の指示に従って，全部の解答用紙（２枚）に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

3　この問題冊子は，２ページあります。はじめに，問題冊子，解答用紙，下書き用紙（１枚（表裏））を確かめ，枚数の不足や，印刷の不鮮明なもの，ページの落丁・乱丁があった場合は，手をあげて監督者に申し出なさい。

4　解答は，すべて解答用紙に記入しなさい。（下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。）

5　文字数制限のある解答用紙の記入については，下記の点に留意すること。

・書き出しは，一マスあける。
・改行したら，最初の一マスをあける。
・句読点は，それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ一マスで使う。
・英数字は一マスに２文字入れてよい。

6　問題は，声を出して読んではいけません。

7　配点は，比率（%）で表示してあります。

試験終了後

8　問題冊子と下書き用紙は，必ず持ち帰りなさい。

次の文章は染織家・志村ふくみの随筆文である。これを読み、あとの設問に答えなさい。

一週すぎると家のそこここに活けた花が精気を失う。この頃はそれでも保つ方だが、山の家から嵯峨へ野の花をはこぶと、空気が違うのか薄などみるみるほうけて輝きがなくなる。かと思うと山の水気を充分含んできたのか、野紺菊や水引草はいつまでも活々している。山に戻ると、先週さかんだった仙人草が野一面に玉座をひろげていたが、今は銀線状の無数の花冠が渋く、控えめである。

秋から初冬へかけて野の変遷ははげしい。落葉の陰に茸がみえかくれする。山道を赤く染めているのは栃の実だった。これはきっと心当てにしている人がいるから拾ってはいけない、と言われた。栃餅の貴重な材料である。この山家の暮しに栃餅がどんなに皆の味覚を楽しませているか、ここへ来てはじめて知った。言葉におきかえることのできない、とくに都会の人に伝えることのできにくい山の味だ。

丹念に灰汁で渋みを抜いて、その実を餅に搗き入れる。木の実の匂いのするほんのり茶がかった小豆色の餅をぜんざいに入れて食べるのは、よほど相性がいいのだろう、はじめて食べた時こんなにおいしいものがあったのかと思った。もっとも私はおいしいものに出会うと、よくこの言葉を発するそうだ。

併しこの栃餅には余韻がある。

先日、竹西寛子著『日本の文学論』(講談社文芸文庫　一九九八年)を書評で読んですぐ求めた。読みすすむうちに次第に心が開かれ、それは折り畳まれた蝶の羽の襞が少しずつ開いてゆくように、私の中にまだ畳みこまれた無明があってそこに光が射すようだった。和歌を一首も詠んだこともない私がここしばらく、古今集、新古今集と思い暮し、うたごころの周辺をさまよい歩いていたようであったが、この本にめぐり会えてようやく道すじが少し見えてきた気がした。しかもその道すじは思いもかけず織の道へも通じていたことに今更おどろくにもあたるまい、とは思うけれど、次の文章を読んだ時、霧雨でも降りかかるように心が動いたのだった。

「ものを読んで感銘を受けたといい、感動したという。それは読後になお揺曳する情緒の経験の外ではなく、用いられた言葉が、直接には用いられていない言葉を次々に読者の内に呼んで惹き起す快い相関現象である。質と強弱の違いを問わなければ、それは、余情、余韻の経験と言い換えてもいいだろう」というのである。著者はそれを、「「余りの心」から「余情」へ」という章の冒頭にかいているが、私がそれを読んだ夜、丁度出来上った一つの着物を衣桁にかけて眺めていた時のことを思い出したのである。一つの作品ができた時、何を思うのかわからぬままに私は「余りの心」、すなわち余韻を求めていたのではなかったか、と思ったのだ。

そこに用いられた色の濃淡や、縞の配列の奥から、そこに用いられていない色合や風情が何とはなく見ている者の内側から誘い出される、その余白にみ

るひとの想いがおのずと浮び上ってくる。たとえば、このような歌、

　み山には霰降るらし外山なるまさきの葛色づきにけり　（『古今和歌集』巻第二十　神遊びの歌）

を何ごとなく口ずさんでいると、あの峠をいくつも越えた山の中に置いてきた私の小さな家のあたりが埋れるように落葉を深め、ぱらぱらとその上を霰が走っている、とそんな想いが胸をみたす。

また、

　み吉野の山かき曇り雪降ればふもとの里はうちしぐれつつ　源俊恵

を読めば、暮れ方を早めて雪空になった戸外を眺めつつ機にむかい、嵯峨のあたりも時雨ているだろうと思う。星屑のようにきらめく古今、新古今の中から一ばん星、二ばん星のように私に語りかける歌はそういう歌なのである。

　現実にたちもどって、歌ではなく、身にまとう着物であれば、そこにどんなに余白が必要なことだろう。着る人の想い、情感を盛る器であれば、多くを語ってならないはずだ。そんなことを若い時は決して思わなかった。ぎりぎりの表現で余白をのこすことなど考えなかった。竹西さんの本を読んでそんなことを思い知らされた。

［出典］志村ふくみ『ちよう、はたり』より

問一　筆者の考えに即しながら、あなたがこれまでに「余韻」を感じた経験について具体的に述べなさい（四〇〇字以内）。（配点　五〇％）

問二　筆者はここで「余韻」の観点から感動について述べているが、感動をもたらす要因にはほかにどのようなものがあるか、あなたの考えを述べなさい（四〇〇字以内）。（配点　五〇％）

（様式８）

採点・評価基準（具体的基準）

教科・科目名	小論文（後期日程試験：令和 5 年度）	問題番号	SB
対象学部・学科（課程）等	人文社会科学部（言語文化学科）		
出題のねらい	筆者が「余情、余韻」や「感動」の経験について、どのように認識し、そこから何を考えようとしたのかを課題文から読み取ることができるか、また自身の解釈などをしっかりと表現できるか、更に普段から言葉について意識し、その感性を磨くことを心がけているかを問うことをねらいとしている。		
採点基準	・課題文の内容を理解した上で、その内容から大きく逸脱することなく、自身の考えや経験を十分に表現しているか。 ・指定した字数通りに書かれているか（字数を大幅に超えていないか、あるいは字数が極端に少なくなっていないか）。 ・「注意事項」の解答用紙の記入に関する留意点を守っているか。 ・文の組み立て方が文法的に整っているか。 ・誤字や脱字、送り仮名の間違いなどがないか。 ・文章全体に整合性があるか。		